

瓜破遺跡 (UR12-1次) 発掘調査 現地説明会資料

2012年(平成24)10月20日(土)
 大阪市平野区瓜破西3丁目地先
 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所

1. はじめに

瓜破遺跡は弥生時代の集落跡として戦前から有名な遺跡です。江戸時代の宝永元(1704)年に大和川の付替えが行われた際、瓜破遺跡を横断して開削されたことにより、古くから河川敷では土器が採集されてきました。昭和15・16(1940・41)年に初めて、大和川河床で採集された土器が学会に発表されました(山本博氏採集地点)。その後も、阪神高速瓜破大橋の西側の和川北岸では、今里幾次氏による調査で弥生時代前期の土器が出土し、昭和27(1952)年には日本考古学協会によって発掘調査が行われ、瓜破遺跡は大阪だけでなく全国にも名の知られた弥生時代の代表的な遺跡となりました。特にこの調査では、弥生時代前期でも新しい段階の土器がまとめて出土し、遺跡の名前をとって「瓜破式」と命名されました。また、大和川南岸でも平成6(1994)年以後、数回の調査で弥生時代中期前半の集落跡が発見され、その全体像は次第に明らかになってきています。

2. 発掘調査の成果

今回の調査では、西側の調査区(D区)において、弥生時代前期末頃～後期の溝・柱穴・土壇(炉跡やゴミ穴など)が多数見つかりました。

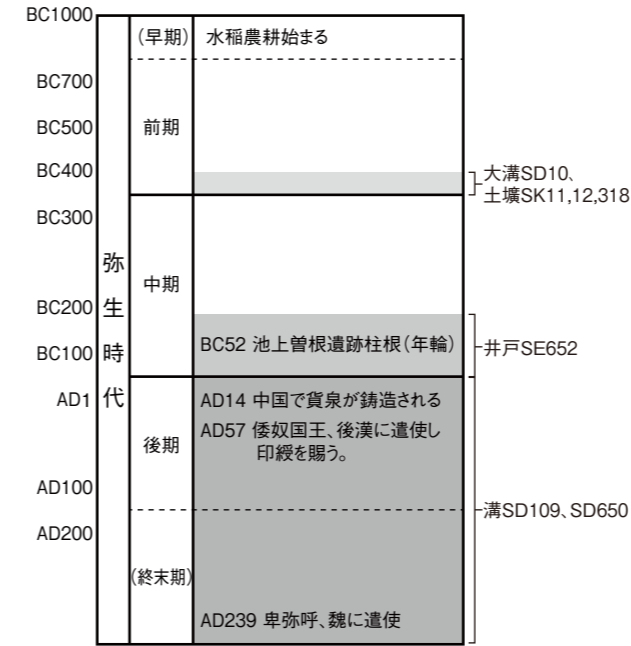
その中でも、特筆されるものは、弥生時代前期末頃(約2350年前)を中心とした遺構です。遺構は集落を囲む環濠の可能性が高い大溝(SD10)の東側を中心に分布していました。大溝を埋める地層からは同時期の多量の土器が短期間に廃棄された状態で出土しました。大溝から東側を中心に、同時期以降、何度も建て替えられた建物の柱穴や炉跡、土壇などが数多く見つかりました(居住域)。

大溝(SD10)：幅3.5m、深さ2.0m、確認した長さは約7mです。断面の形状は上下逆さまの台形で、溝の底では水が淀んだ状態だったようです。ここからは土器や木器が数多く出土しました(写真1)。また、大局的には付近一帯が北西方向に傾斜する地形であるのに対して溝は北東方向に延びています。これらの状況から環濠の一部と考えられます。

居住域：今回みつかった居住域(約90㎡)の中に、柱穴などの小穴が210基、炉跡が7基のほか、土器が廃棄された土壇などが見つかりました。このうち、柱穴や炉跡は竪穴建物を構成したものとみられましたが、遺構の重なりが著しいため、建物の形がはっきりしているものは認められていません。それだけ長い期間に同じ場所で住居が建てられ続けていたことを示しています。

3. 調査成果の意義

今回の最も重要な点は、瓜破遺跡において初めて弥生時代前期末頃の集落の一部が、環濠の可能性のある大溝を伴う状況で明らかになったことです。この調査結果によって、戦前・戦後に行われた研究成果を再確認し、集落の範囲や時期ごとの動きといった弥生時代の集落研究にとっても、重要な資料を得ることができました。



兵庫県考古博物館平成20年「開館記念展Ⅲ 光は西から 弥生人、文明との出会い」を基に作成

図1 弥生時代の時期区分



写真1 大溝(SD10)から出土した遺物

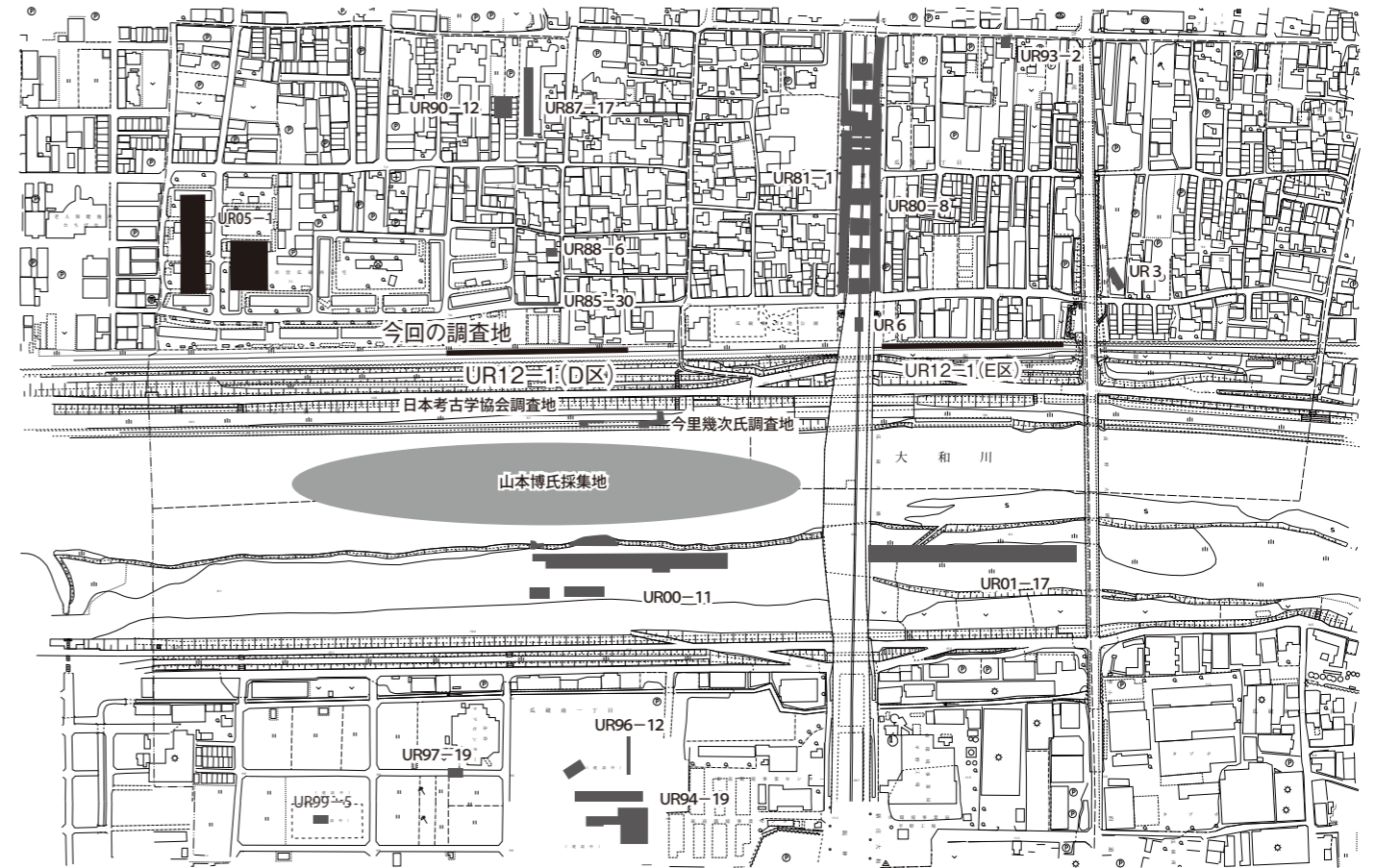


図2 調査地位置図



溝SD122(南から)



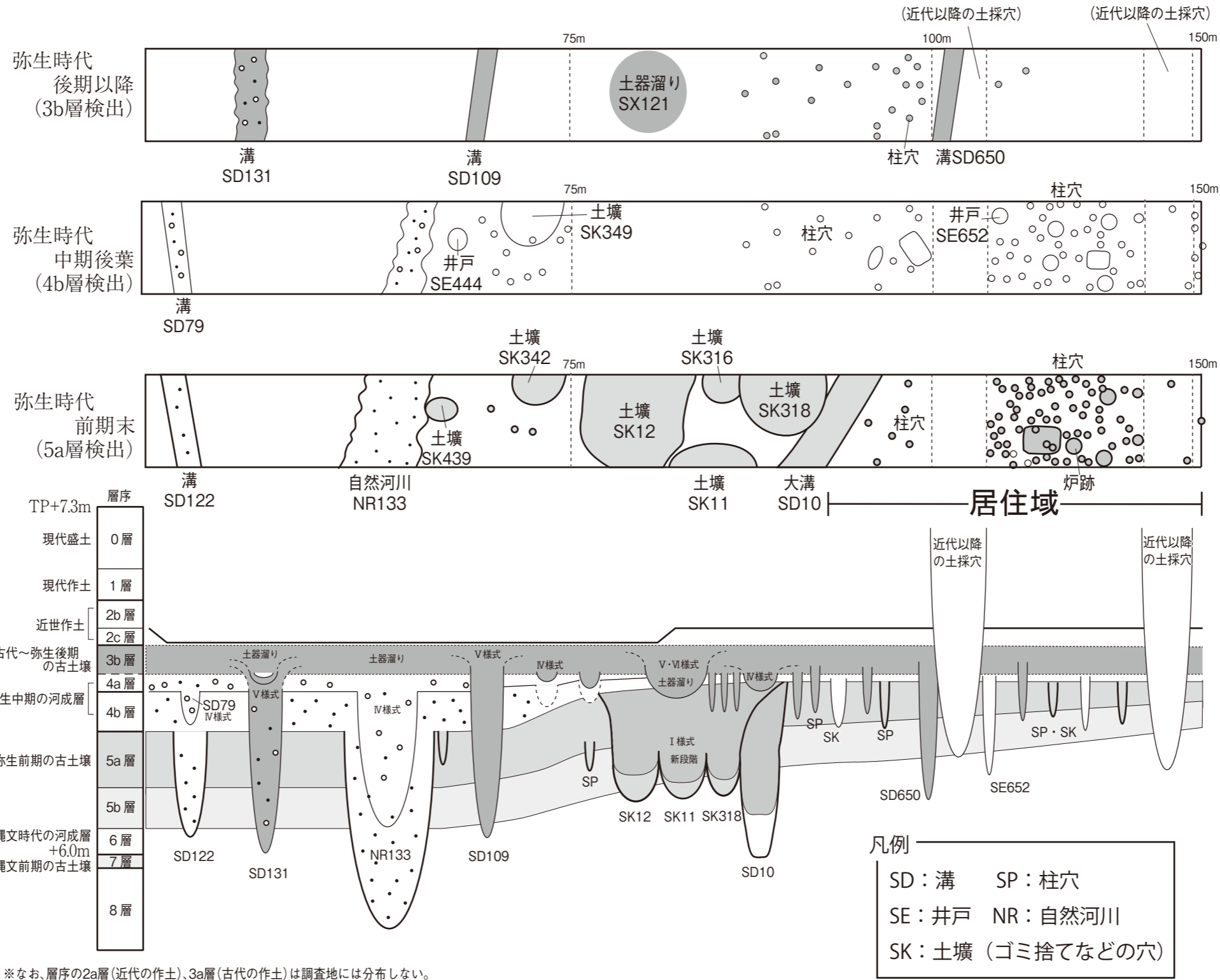
溝SD131(南から)



自然河川NR133(南西から)



溝SD109遺物出土状況(南西から)



居住域の遺構検出状況(西から)



居住域での遺物出土状況



炉跡の検出状況



絵画土器等の出土状況



大溝SD10完掘状況(南西から)



弥生時代中期後葉の遺構 (大溝SD10埋没後)



井戸SE652の遺物出土状況(南から)

図3 今回の調査成果図